

特集

障がいのある子どもの フィジカルアセスメント

～複雑で多様なヘルスケアニーズをもつ子どもと家族に対して看護師ができること～

＊ 特集にあたって ＊

身体と生活を整えるための“共通する目”

障がいのある子どもたちの身体の状態が整い、リスクや危機が回避され、年齢にふさわしい活動に参加することは、その子どもの生命を最大限に輝かせることにつながります。子どもたちの生命は、子ども自身の生命力だけではなく、家族や専門職のフィジカルアセスメントに基づいたケアに委ねられているといっても過言ではありません。そこで、障がいのある子どもたちにとって最大限の生命の輝きを可能にする、フィジカルアセスメントをメインテーマとしました。

看護師は、高度先進医療機関から、外来、在宅、地域、療育、教育などのさまざまな場において、一人ひとりの子どもたちの状態に応じた健康で文化的な生活を支える役割があります。これは、子どもたちの療養や生活の場によらない共通する役割です。障がいのある子どもたちは、複数の医療機関で治療や医学的管理を受けながら生活し、時には、かぜなどの一般的な病気、原疾患の急性増悪、成長・発達による身体変化、加齢による随伴症状の悪化などにより、入院治療を繰り返しています。医療機関の機能分化により、病状や病態により入院先がそのつど異なることもあります。したがって、それぞれの治療・療養の場がかかわる看護師が“共通する目”をもつことができれば、行く先行く先で、子どもと家族が同じ説明を繰り返す必要はなくなります。

“共通する目”とは、この子どもにとってどのような状態が正常であり、どのような状態が正常では

ないのかを理解する「ものさし」です。“共通する目”をもつには、身体の形態や機能、成長・発達の知識をもち、病態、すなわち障害を呈する疾患・疾病による身体の反応・影響を考えるという基本に立ち戻り、複雑に影響し合う病態・病状を紐解き理解することが必要です。そして、看護師が提供するケアの根拠、身体への影響を査定できることであると考えます。それにより、健康増進の視点で、子どもたちへのケアの工夫や改善がされ、状態はより安定し、身体機能の向上も考えられます。“共通する目”は日々の実践経験のなかで蓄えられ、鍛えられていくものです。やみくもに、一人ひとりの子どもの個性を積み重ねていくにはあまりにも時間がかかります。共通項を取り出して整理し、知識を体系化することにより、個の反応をとらえて意味づける看護師の力もあがっていきます。

なお、本特集は、認知(知的)機能の制限、運動機能の制限に加え、高い医療ニーズをもつ子どもも含めています。児童福祉行政で定義されている“障害”という用語は、広い概念です。そこで、「複雑で多様なヘルスケアニーズをもつ子ども」と言い換え、副題としました。また、「障がい」という表記を用いましたが、専門用語の一部として使用している場合は「障害」と漢字表記しました。各執筆者の項については、執筆者による表記を用いています。

千葉科学大学看護学部講師／小児看護専門看護師

市原真穂 Ichihara Maho